令和八年　秋の課題作文・読書感想文
～塾長講評～

テストでは測れない生徒の光を見つけたい、輝かせたいという思いからスタートした読書感想文・課題作文コンテストも来年二十周年を迎えようとしています。ＡＩの進化が目覚ましいですが、ＡＩを使いこなすのに欠かせないのが自分の思いを的確な言葉にして伝える力です。その力の大切さを感じ取ってもらう機会とするためにもコンテストを継続していきたいと考えています。

さて、今回も前回に引き続き、小学生向けの読書感想文については「金賞受賞作品該当なし」という残念な結果になってしまいました。私たちの考える金賞作品とは「作文全体を通して他の生徒たちに大きな学びを与えられる作文」です。今回の銀賞作品、そして受賞は逃したもののノミネートされていた作品には共通して「物語の内容を『わたくしごと』化できている」という良い点がありましたが、その一方で、世の中の課題についての考察やその解決策が具体的ではなかったところが残念でした。これらを深掘りできれば金賞に近づいたのではないかと考えます。ぜひ今後の参考にしてください。

続けて中学生向け課題作文についてです。最近の「円安ドル高」傾向と、昨年のアメリカでの１¢硬貨製造廃止に着想を得て、財布の中で溜まりがちな「１円玉」の存在にメスを入れてみました。課題として出した資料読み取りは三つあって、一つが十年前と今を比較した円の下落率、二つ目がアメリカの地方スーパーの陳列棚の画

像から感じたこと、最後が十年前と今を比較したキャッシュレス決済の割合の変化についてでした。

ここでお詫びがあります。私は一つ目の課題の答を元々「下落率四十％」としていました。しかし、複数の講師から「四十％はドルの上昇率を表していて、円の下落率は三十％とするべきではないか」という指摘があって精査した結果、皆さんの作文を添削している途中で答の修正を図った次第です。申し訳ありませんでした。そもそも今回のケースでは下落率を要求すること自体が不適切で「何円の下落か」という条件設定にするべきだったと反省しています。重ねてお詫び申し上げます。

話を戻します。今回は一つの金賞受賞作品、三つの銀賞受賞作品が選出されています。金賞受賞作品は一つ目と三つ目の数値で答える課題に対して正確に回答していたことに加えて、二つ目の課題についての考察が際立っていました。読み手の「なるほど…」という共感を引き出して文全体の説得力を高めている好例であったと考えています。

一方で、今回は全ての条件を網羅していない作品も目立ちました。特に課題作文では与えられた条件を守らなければ妥当な評価は得られません。これは肝に銘じてください。

最後になりますが、当塾の全講師も中学生向けの課題作文に挑戦しています。そのうちの一つを優秀作品として公開します。全ての条件を守った上で一貫して「1円玉は不要」という立場で論を展開しています。ぜひ一読ください。「学ぶ」の語源は「真似ぶ」です。「これはいい」と感じたものを自分の中に取り入れて再現できるよう努めてくれることを願っています。